

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26850142

研究課題名(和文)生態系保全型農業のステイクホルダー分析-サプライチェーンとバリューチェーンの検証

研究課題名(英文)Stakeholder analysis for biodiversity friendly agriculture - Verification of supply chain and value chain

研究代表者

大石 卓史(OISHI, Takafumi)

近畿大学・農学部・講師

研究者番号：00555667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：生態系保全型農業に取り組んでいる農業者やその支援者、関連事業者(米穀店が中心)、一般消費者を対象に、アンケート調査やインタビュー調査を実施し、各主体の現状や意向等の把握を行った。また、これらの一連の調査を通じて、生態系保全型農業の関係者間におけるサプライチェーンならびにバリューチェーンの検証・整理を行った。

研究成果の概要(英文)：I conducted a variety of research, it was to understand the current situation and intention of farmers and distribution business and consumers. In addition, through a series of these research, it was carried out to verify and organize the supply chain and value chain in among stakeholders of biodiversity friendly agriculture.

研究分野：農業経済、環境経済

キーワード：生態系保全型農業 環境保全型農業

### 1. 研究開始当初の背景

近年、我が国において、農業の生産地周辺に生息する生物の生息環境に配慮した生産活動を行う等、農業生態系の維持・保全に特段の配慮を行いながら生産を行う「生態系保全型農業」に関する取り組みが徐々に広がりを見せている。

生態系保全型農業は、生態系の保全と農産物や産地のブランド化による農業経営の改善を一体的に進めることで、農業の持続性を高める取り組みとして、有用な要素を有している。また、生態系保全型農業の特徴を踏まえると、その推進のためには、地域の農業者とそれを支持しようとする地域内外の消費者をはじめとした多様な関係者の参画・連携、換言すると、産物に関するサプライチェーンと関係者間でのバリューチェーンの構築・拡大が重要であるといえる。しかしながら、現状では一部の地域・組織を除いて小規模な取り組みが多く、地域住民や都市部の消費者、流通事業者等の認知度や関わりも不十分といった課題が指摘されている。

以上のような背景を元に、生態系保全型農業に関わる多様な関係者(ステイクホルダー)間の連携状況に着目しつつ、サプライチェーンとバリューチェーンの検証を行うとともに、生態系保全型農業の普及に向けた課題や推進方策の特定化を行うことで、生態系保全型農業の取り組み推進、ひいては地域農業の持続性向上の一助とするという着想にいたった。

### 2. 研究の目的

生態系保全型農業に取り組んでいる主体やその支援者を対象としたアンケート調査、インタビュー調査等により、取り組み地域の状況分析を行う。

あわせて、生態系保全型農業による生産される農産物の購入者となり得る流通事業者や消費者を対象にアンケート調査やインタビュー調査を行い、現在のかかわりや認知・評価、今後のニーズ喚起方策等について分析・考察を行う。

これらの各種調査をもとに、産物に関するサプライチェーン、関係者間でのバリューチェーンの検証・整理を行う。

### 3. 研究の方法

(1) 生態系保全型農業に取り組んでいる主体やその支援者を対象とした調査

郵送方式のアンケート調査、訪問形式のインタビュー調査等を行った。

(2) 流通事業者を対象とした調査

郵送方式のアンケート調査、訪問形式のインタビュー調査等を行った。

(3) 消費者を対象とした調査

インターネットアンケート調査を行った。

(4) サプライチェーン、バリューチェーンの検証

(1)~(3)の調査結果を元に、検証・整理を行った。

### 4. 研究成果

(1) 生態系保全型農業に取り組んでいる主体やその支援者を対象とした調査

農業者等を対象に行ったアンケート調査(平成26年度実施)からは、取り組み開始の時期や規模(人数・面積)はばらつきがあるものの、稲作分野の取り組みが多いこと、生態系の保全にあたりシンボル種を設定しているケースが多いこと、産物の販売は国内各地で行われていること、販売単価は同じ地域の他の農業者より高めに設定しているケースが多いこと、行政・地域住民・事業者・都市住民・NPO等と多様な連携をしていること、農産物の生産技術に加え、産物の販売や組織づくり・人材育成の面で課題を感じているケースが多いことが明らかになった(図1)。

また、農業者等を対象に行ったインタビュー調査(平成27年度実施)からは、生態系保全型農業の取り組み進展に伴って、新たな課題(生態系保全の取り組みによる生産性の低下等)が生じていること、関連農産物の販売にあたっては産地見学会や都市部での説明会、日頃からの情報発信等を通じて、流通事業者や消費者等とのネットワークを維持・拡充することが重要であること等が明らかとなった。

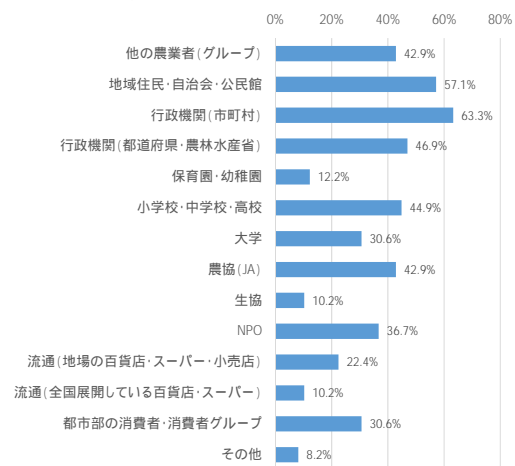


図1: 生態系に配慮した農業の取り組みを行う際に、連携している方々(回答数: 49)

(2) 流通事業者を対象とした調査

流通事業者(米穀店が中心)等を対象としたアンケート調査(平成27年度実施)からは、生態系保全型農業関連の農産物の取扱を開始したきっかけについては自発的なケースと営業を受けたケースの双方が多いこと、店頭での農産物の販売にあたっては特設コーナーやPOPの設置等で積極的なPRを行っているケースが多いこと、農産物の仕入単価や販売単価は通常の商品に比べて1~3割

程度高めの価格に設定しているケースが多いこと、コンセプトのみならず食味についても評価が高いこと等が明らかとなった（図2～3）

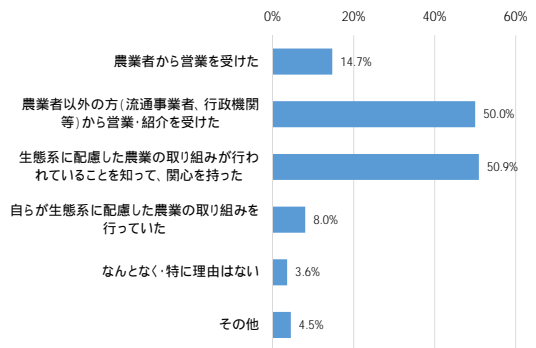


図2：「生態系に配慮した農業由来の農産物」の取り扱いを始めたきっかけ・理由（回答数：224）

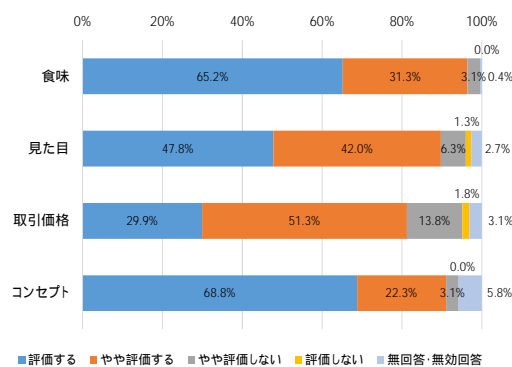


図3：現在取り扱っている「生態系に配慮した農業由来の農産物の評価」（回答数：224）

### (3)消費者を対象とした調査

消費者を対象としたアンケート調査（平成26年度、27年度実施）からは、現状では生態系保全型農業やその農産物と直接関わりのある消費者の割合は1割前後の水準にあるものの、今後の農産物の購入についてはポジティブな意向を示す消費者が多いこと、生態系保全型農業に関する情報（課題、意義・効果、推進方法）を付与することで、その意向がさらに増すこと等が明らかとなった（図4～6）

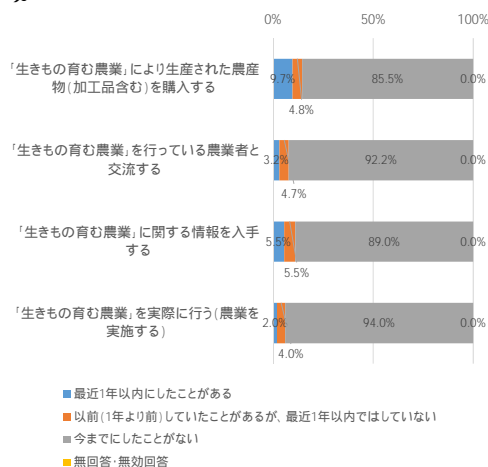


図4：「生きもの育む農業」との関わり（回答数：600）

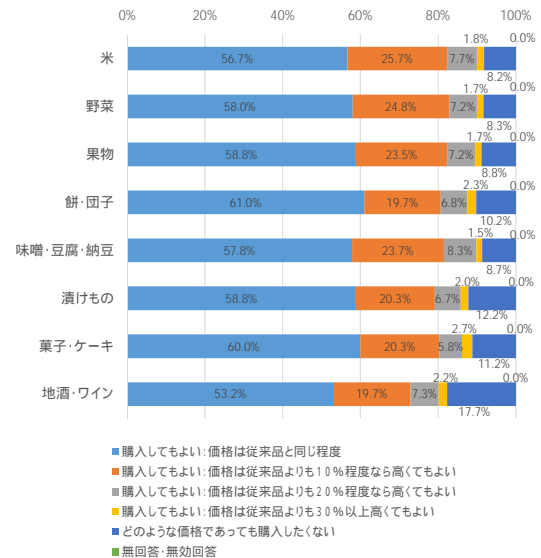


図5：今後、購入したいものとその単価（回答数：600）

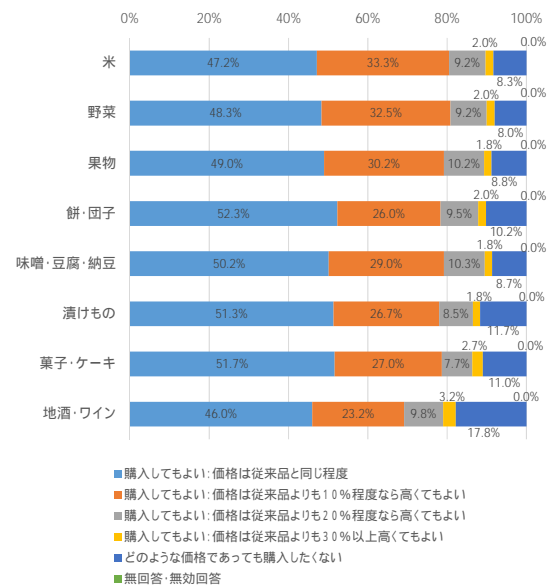


図6：今後、購入したいものとその単価（情報追加後）（回答数：600）

### (4) サプライチェーン、バリューチェーンの検証

生態系保全型農業由来の農産物のサプライチェーンについては、農業者から消費者への直接販売、スーパー・米穀店等の流通事業者経由での販売、外食での利用等、多様なパターンがあることが明らかとなった。生態系保全という、消費者にはややなじみの薄い事項を扱うため、対面での説明ができる店舗（米穀店等）での販売等が、商品の訴求のためには重要になると思われる。

また、生態系保全型農業の取り組みを通じて、地域社会の関係者や都市部の関係者との多様な関係作りがなされていることが明らかとなった。ただし、現状で十分な関係が構築できていると思われるケースは少ない

め、今後も多様な関係作りの進展が重要といえる。

近畿大学・農学部・講師  
研究者番号：00555667

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Takafumi OISHI(2016):“ Possibility that biodiversity conservation will lead to improvements in the unit sales price of agricultural products - Analysis of a questionnaire survey of farmers carrying out Ikimono Mark practices ”, Journal of Environmental Information Science, Vol.44, No.5. pp.63-70. 査読有

大石卓史・大南絢一(2015):「生物多様性に配慮した農業由来の農産物・加工品に対する消費者選好 - 品目別の価格プレミアムとその規定要因 - 」『フードシステム研究』Vol.22, No.3, pp.287-292. 査読有  
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jfsr/-char/ja/>

Takafumi OISHI(2015):“ Analysis of Value Recognition and Features of Biodiversity-Friendly Agriculture Perceived by Urban Residents ”, Papers on Environmental Information Science, No.29, pp.89-94. 査読有  
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/eispapers/-char/ja>

[学会発表](計2件)

Takafumi OISHI(2015):“ Analysis of Value Recognition and Features of Biodiversity-Friendly Agriculture Perceived by Urban Residents ” 『第29回環境情報科学 学術研究論文発表会』、2015年12月1日、日大会館(東京都千代田区)。

大石卓史・大南絢一(2015):「生物多様性に配慮した農業由来の農産物・加工品に対する消費者選好 - 品目別の価格プレミアムとその規定要因 - 」『2015年度日本フードシステム学会大会』、2015年5月31日、東京農業大学(東京都世田谷区)。

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

大石 卓史(OISHI, Takafumi)